

計画的避難区域から思いつくこと —— 帰るために前へ進む

菅野源勝

思

い出したくない三月十一日の震災。そして福島県民は東京電力福島第一原発事故によって大変恐ろしい体験をした。私たちは目に見えない放射性物質（放射能）に悩まされ、今後もこの物資と付き合い続けなければならない。

東京電力の事故は、私たちが暮らしてきた自然豊かな山木屋地区（福島県川俣町）を汚染し、家族愛あるこの地から、家族をバラバラにした。豊かな農地からとれる米をはじめ、野菜、花、家畜など素朴な農畜産物を育てられなくなり、農家の生活までも奪い取った。絶対に忘れてはならない事故であり、二度と起こしてはならない事故である。

山

木屋地区は事故発電所から三十数km離れている。事故直後は官房長官の「ただちに健康に害はない」という言葉を毎日数え切れないほど聞かされた。それで

一カ月ほどは農作業を続けていた。四月十二日に山木屋が計画的避難区域に指定され、驚きと同時に不安に苛まれた。官房長官の言葉が嘘に聞こえ、国に対して不信感が生まれた。

山木屋の地区民は先の見えないトンネルに入った。初めは避難先を探した。計画的避難区域に指定されていない同じ川俣町内、それ以外の場所に住む知り合い、親戚を訪ね歩いた。子どもがいる親子から避難を始めた。それまで一緒に暮らしていた家族は散り散りになった。牛や豚などの大型家畜を持つ人は家畜の移動に時間がかかったために、すぐには避難できなかった。仮設住宅を待つ人も三カ月くらい放射能との生活を余儀なくされた。

私は町内の借り上げ住宅に家族四人で避難した。一緒に避難した地区民の人たちとももそこで暮らしている。借り住まいでの生活は大変なものだ。狭い部屋での生活。外孫には放射線量が高いから「来ないで」と言う。内孫は県外へ避難してしまっている。このように家族の繋がりがなくなった人は多い。以前のように土に触れることもなくなり、こんな生活がどのくらい続くのかと先が見えない不安は拭いきれない。

私を含め山木屋の自治会役員たちは日々会合を重ねている。多くの地区民は帰りたいたいという願いを持っている。だから地区民みんなで帰ろうと話を進めている。

しかし放射線量が低くならない限り帰れない。みんなで帰れるようにするにはまず除染をしなければならぬ。試験的な除染は始まっている。今年の八月までには試験を終え、その結果を元に本格的な除染を開始することになっている。だが、除染をすれば農作物はつくれるのか、安心して食べることができるのか、若い人たちは帰ることができるのか、農産物をつくっても売れるのか、いろいろ考えてしまっこともある。

家を見回るために山木屋に行ってみれば、農地は荒れ、野鳥が見えなくなり、カラスも避難したのかと思うほどその姿が見えなくなっている。荒れた農地の前に立つ



かんの げんかつ
1947年、福島県川俣町山木屋生まれ。山木屋自治会副会長。中学校卒業後、プロイラー生産を約40年間行ってきた。その後は直売所販売中心の野菜、大豆を生産。大豆は味噌、豆腐、納豆に加工し、川俣町学校給食センターで扱われている。

意見
異見

リレーエッセイ ● 62

と、今一度手をかけて土を黒くしたい、という思いが強くなり湧き上がってくる。緑豊かな山木屋をもう一度取り戻したい。そのためにはやはり除染を進めることだ。宅地、農地、山林から放射性物質を取り除き、安全に食べることが出来る農地や里山にすることだ。三月十一日以前の山木屋に近づけるには、多くの労働力と時間が必要だろう。除染のやり方にも「十人十色」というように多くの意見があり、前に進むことに足踏みすることもある。除染方法を早く定め、それを進め、安全な農産物をつくれる農地にし、安心して暮らせる山木屋をつくることである。国は福島県の農産物が売れるように責任を持って検査し、安全な農産物を流通させ、消費者に安心を与えてほしい。

経

済成長に後押しされ、農業の機械化が進み、個人主義・核家族化で「結い」がなくなりつつある。震災後は「絆」という言葉が多く使われているが、少し前までは「結い」があった。珍しいものが収穫されたときは地域に配ったり一緒に収穫を祝ったりしたものだ。近所一〇軒くらいの人が重箱を持ちよって山の神社に集まり、飲み食いしながら語らう「講」もあった。「講」は季節を感じるものだ。季節ごとに共同作業をしながら絆を深めていた。時代の流れの中で個人主義が進み、絆が薄れ「結い」が崩れつつある。こんなときだからこそ「結い」や「講」の大切さを感じる。人が集まり、畑のこと、作物のこと、季節のことなどを語らうなかで絆は深まってくるのだと思う。

帰

るからには何かをしなければならぬ。何が出来るかを考えなければならぬ。昨年は植物による除染の実証試験をした。農研機構に協力してもらい、ケナフ、キノア、アマランサスを植えた。今年も植物による除染を計画している。また

放射性物質を吸収しやすい植物と吸収しにくい植物の実証試験も予定している。今のところナス科作物は放射性物質を吸収しにくいと聞いている。だから、今はその準備を進めている。そういう作物を選定していくことが、今できることのひとつだと考えている。

私たちは山木屋に帰る口を待ちながら復興に向けて歩んでいる。いつ帰れるか、農業が再開できるかわからないが、とにかく帰ることを前提に物事を進めていかなければ気が滅入ってしまう。山木屋地区民だけでなく、川俣町内、近隣市町村、福島県全体で一緒に歩むことにより、課題はより解決されやすくなるだろうと思う。修復する「復興」だけでなく、幸せになるという次の「福幸」に向かって歩みを進めたいと思っ

意見
異見